

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷二十第

論說

戰時戰後に於ける獨逸税制變革……………法學博士 小川郷太郎

地方税としての所得税の重要……………法學博士 神戸 正雄

勞賃と勞働生産力との關係……………法學博士 田島 錦治

文明史に關する論争……………法學博士 財部 靜治

植民地の財政政策に就きて(四)……………法學博士 山本美越乃

時論

常平倉運用の標準……………法學博士 戸田 海市

說苑

京城六矣廩に就いて……………經濟學士 黒 正 巖

雜錄

史的唯物論略解……………法學博士 河上 肇

富といふ支那字に就て……………法學博士 河上 肇

新著紹介……………法學士 本庄榮治郎

富といふ支那字に就て

河 上 肇

英文の *wealth* (富) という字は、*weal* (福) に *th* を附けて出来たもので、その構成は、*health* (健康) という字が、*heal* (快癒) に *th* を附けて出来たのと同じである。又その意義は、元と人間心身の幸福の状態を指したもので、それが後には、人間の幸福が主として外界の物質的材料に依存すると云ふ所から、轉じて外界の物財即ち今日謂ふ所の富を意味することになったのだと云ふ。されば、古い文章には、*wealth* という字が略ぼ *welfare* と同じ意味の所に用ひてある、と云ふことだ。そこで私は、支那字の富と福とを比較して見る氣になつたが、さて此の二字を比べて見ると、そこに共通の畵があるので、その畵が英語の *weal* に相當するものではあるまいか、との疑問を起した。それは數年前のことである。さうして私は、當時此事を友人小島祐馬君に質ねて、詳細なる説明を聞き、大

に利益したことがある。しかるに近刊の『支那學』(第一卷第五號、大正十年一月發行)を見るに、同君の『釋富』と題する一文が載せられてゐて、富なる文字の構成並びに意義等が、そこに詳しく説明せられてゐる。私は、本誌の讀者と同時に『支那學』の讀者となつてゐる方は、極めて少數であらうと信ずるから、茲に其の概要を抄録して之を同好者に知らせたいと思ふ。

小島君の言ふ所によれば、從來富の字を解釋せる主なるものとしては、許慎の『說文』があるが、其說によれば、富は形聲の字であつて、富は單に音を表はす爲めのものである。又新しい所では、劉師培の解釋の如く、富字を以て田に従ふものと爲す説がある。日本に於ても、富の字田に従ふが故に、富の觀念は農業經濟の時代に至つて發したものと唱へた學者がある。(抄録者いふ、嘗て三宅雪嶺博士が富を以て田の字より出來せるものと説明されたるは、余の今記憶する所である)猶ほ劉熙の『釋名』には、富の字の解釋は出てゐないけれども、彼は福の字を解

釋して富の字より出で來れるものとしてゐる。此の如く、富の字については、或は之を以て形聲の文字と爲すものがあり、或は會意の文字と爲すものがあり、更に富と福との關係については、富は福に先つて存在せし文字だとするものがある。しかるに、小島君は『富と福とを以て單なる普通の文字とせず、本來同一なる文字の異體と爲す者である。而して富の下部を爲す富は、尊即ち酒器の形象文であつて、これが實に富の字の根幹であり、決して單に聲を表はすのみの方ではないと思ふ。同時に、其下部の田のみを取つて説を爲す如きは、……無論不通の説であらう。又福を解するに富字を以てし「其中多品如富者」といへるは、富字發生の經過より觀て、是れ全く本末顛倒の解釋であることがわかる」として居られる。

しからは、同君は何に據つて斯かる説を主張せらるゝやと云ふに、その大體の筋道を摘録すれば、次の如くである。

先づ富の字の普通の用法としては、(一)財に豊

なること(例へば『孟子』に『爲_レ富不_レ仁、爲_レ仁不_レ富』といへるが如き)、(二)財そのもの(例へば同じく『孟子』に『非_レ富天下_一也、爲_二匹夫匹婦_一復_レ讎也』といへるが如き)、(三)すべて物の充裕せること(例へば『論語』に『富哉言乎』といへるが如き)を意味する爲めに用ひられてゐる。

しかるに、此外、(四)古典の中に於ては、富は又福と同義に用ひられてゐることが、吾人の注意を惹く。(抄録者いふ、此事は英語の場合と同じで、甚だ興味あることである。)例へば『詩』大雅瞻印『何神不_レ富』(毛傳曰、『富福也』)といふが如き、即ちそれである。

それでは、富の字と同義に用ひられてゐる福の字は、果して何を意味してゐるのか。(一)先づ羅氏の『殷虛書契考釋』によれば、福の字は、殷の時代に在つては、祭祀の名であつたやうである。その引く所の龜版文字に見えたる福の字の原形とも見るべきものは、(原文略す)、両手を以て尊(即ち酒器)を神(示)前に奉ずる象である(二)次に福は祭祀に用ふる酒肉の稱として用ひら

れ(例へば『周禮』膳夫『凡祭祀之致_二福者_一』の鄭注には『福謂_二諸臣祭祀進_二餘肉_一歸_二胙於王_一』とあり、『宋書』には『太祝令_二各酌_二福酒_一云々』とあるの類)、(三)又祭祀によりて鬼神より享くる祐助の義に用ひられ、(四)猶ほ福を以て道德ある者に降ると爲すより、遂に道德其者の完備を以て、直ちに福と爲す思想も見はれてをり(『禮記』祭統に『賢者之祭也、必受_二其福_一、非_二世所謂福_一也、福者備也、……言内盡_二於己_一而外順_二於道_一也』とあるの類)、(五)最後に福はすべて境遇の安吉なるを稱する語として用ひられて居る。

是に由て觀れば、富と福とは略は同義に用ひらるゝ場合が少くない。而して假令部分的にもせよ、此の如く富と福とが同義に用ひられて居ることは、富の字を解釋する上に、誠に重要な手懸りである。しかるに、この富と福との兩者は、更に一步深く索つて見ると、『獨り其義に於て同様に用ひらるゝことがあるばかりで無く音韻の上より觀て、兩者は全く相一致する文字であることがわかる。』今の音では、富は去聲

二十六宥の韻に屬し、福は入聲一屋の韻に屬してゐるが、併し今日の宥韻の字と屋韻の字とは、古音では共に同一部に屬してゐる。されば富と福とは、古來同韻の字にて、古に在りては、共に上聲としても用ひられ、又共に入聲としても用ひられてゐる。』

しかるに富と福とは、啻に此の如く同義且つ同音であるのみならず、更に其の字形より考ふるに、『富の字が本來福と同一文字であるといふことを推定し得る。』何故といふに、羅氏の『殷虛書契考釋』に掲ぐる所の殷代の龜版に見えたる福の字(原文略す)と、吳大猷の『說文古籀補』に掲ぐる所の周代の彝器に見えたる福の字(原文略す)とを見るに、『福の字は』本來兩手を以て尊(抄録者いふ、この尊に相當する部分が今の福の字の傍に當る)を神(示)前に捧ぐる象であつて、或は兩手を省き、或は兩手と示と共に省けるあり、(抄録者いふ、此の場合のものは略ぼ今の福の字の傍に似た形をとる)又尊と示との文は繁簡種々であつて、偏傍の互に入り替れることは、古文の例として、固より

普通の事である。然るにやはり周代の彝器の中に、『福の字の異躰と認むべきものがある。』(原文略す)が、それを見ると、『福の字の上に更にフを加へたものもある。』フは即ち屋を意味し、屋下に物を藏する象なれば、福を所有したる象亦之を福と爲すのであらう。然るに福の字必しも示に従はず、示を省きて猶之を福と讀むことは：羅氏吳氏の引く所に由つて之を知ることが出来る。是に於て予は、富の字が本來福と同一文字であるといふことを推定し得ると思ふ。即ちフに従ひ福の字の示を省きたるものに従へる富の字は、フに従ひ福の字の示を省かざるものに従へる福と、本來同一文字にして、やがて又フに従はざる福とも、同一文字なることを推定して敢て不合理ではあるまいと思ふ。』

以上の理由により、著者は富と福とを以て『本來同一なる文字の異躰』と爲し、而して其の異躰の一たる富の字は、轉じて『境遇安吉の主たる要素たる豊財の義に用ひられ、又轉じて財其者を表はすことゝなり、同時に他の一面に於て

すべて物の充裕せるを示す語となりしものに非ざるかと思ふ」と言つてゐるのである。

以上が『釋富』と題する論文の大要である。出來得る限り簡潔に書かれたりと見ゆる原文を、更に抄録したことであるから、著者の意を損すること少くなかつたであらうと思ふが、それは宥怨を乞ふの外はない。なほ著者の論斷の當否に至つては、私は全くの門外漢であるから、何とも判斷のしやうが無いが、しかし經濟學の研究物體とも謂ふべき富といふ字の由來につき、此の如き研究あることを紹介したと云ふことに就ては、必しも讀者の咎を蒙らぬであらうと信ずる。